

Takashima Toujyu Kai

会報

No. 24

2020.9.18

## 高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224

滋賀県高島市安曇川町上小川 225-1

藤樹書院・良知館内

電話・FAX 0740(32)4156

藤樹先生の教えを  
まちづくりに

高島藤樹会 理事 保木 隆

私が藤樹会で学ばせていただいているのは、お世話になった松下亀太郎先生の『物語 中江藤樹』を読ませていただいたことがきっかけです。昭和五十五年秋、何度かお宅へお邪魔させていただいた際、参考の書籍が並ぶ日当たりのよい書齋、正座で一心に原稿用紙にペンを走らせる姿を見ました。出版後、先生から直々の手紙をつけて箱入りの書籍を自宅へ届けていただいた私は、通り一遍のお礼の言葉を返したただけでした。そんな私に愛敬の心で接していただき、今は、それに応えたい気持ちで過ごしています。



生涯学習のまちづくりという言葉をよく耳にした。その後、長い不況、町村合併や行財政改革等が叫ばれた

昭和から平成の  
始め頃、  
生涯学習  
の時代、

反面、生涯学習のまちづくりの声は低くなりあわたたしく時が経過した。

高島市は、「生涯学習のまち」へ歩んだのでしょうか。公民館は様変わりし、行事や企画力は陰り、公的社会教育は後退しつつある感を抱かざるをえない。

本市のホームページには、関係箇所以下の方針が掲げられている。「高島の良さである、「あたたかい人間性・地域性」、「中江藤樹先生の教え」を生かしながら、高島の人、心、学校、家庭、地域をつなぎ、郷土高島に誇りを持てる地域ぐるみの教育を推進する。」と。



本藤樹会のビジョンも、「近江聖人中江藤樹先生の『孝』の思想を高島から全滋賀へ…全世界へ広める」である。発足以来、歴代会長のリーダーシップのもと本市の教育方針とほぼ同じ方向で歩みを進め、大洲市との交流も深めてきている。

今後、藤樹先生の「孝」の教えをさらに県下、全国へ広げて行くには、

本会のみで推進するには力の及ばない面も出てくるのではと思われる。

たとえば、藤樹会会員から藤樹先生関連の各団体が力を合わせて「藤樹まつり」的なものを作りたいという構想を示されているが、会として他団体との接点も乏しいため相手の活動や方針が不明で次の一歩が踏み出せていない。

現在の本市に、まちづくりにつながるこのような構想を相談する窓口や共に伴走する仕組みが、私には少し欠けているような気がしてならない。

今後、藤樹先生の教えをまちづくりに生かすには、その部分の行政の手助けが必要ではないだろうか。主役は藤樹会や市民であっても条件整備やコーディネーターの役、時には強力で推進する役割を今後の市行政に期待したい。

『翁問答』等に表示されている藤樹先生の教え、「われも人も、人間のかたちあるものはみな兄弟なり」、「至徳要道…」など、自らを律することを本とする教えは、これからのひとづくり、まちづくりで不可欠なものである。

冒頭に記した、松下先生から「藤樹先生の勉強してや。」と記された手紙を忘れず、藤樹会の発展へ微力でありますが関わって行きたいと思っています。

## ひじりの声 上田 藤市郎

第二次世界大戦が終了したとき、夥しい人命、資財を失い、人間相互の信頼や精神的な遺産も壊され世界の良識ある人々は戦争の無意味を痛感したはずである。その後七十五年を経て、今日の我が国や世界の状況を見ると、その時代の人間が、命や平和について抱いた反省や未来への希望が、どんなに切実なものであったとしても、その迫真性を次世代に伝えることは極めて困難であることがわかる。

今なお、核兵器を保持する国家は減らないし、被爆国である我が国がそれを非難することもない。軍事力を背景に国家や市民を暴力で支配する権力、莫大な資金を使って恣意的な政治を進める指導者、独裁で専制的支配力を行使して人民に恐怖心を与え続ける体制もある。この理不尽な世界の状況は、過去と少しも変わっていない。我が国の政治家は与野党を問わず、自己責任回避と付和雷同傾向が強く、政治家としての確固とした展望と説得力を欠いている。

ここで重要なのは、我々個々人の明確な意思力である。自分はどう生きるのかを考え直して、不動の指標を明示しなければならぬ。

## 藤樹人間学塾… 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせることで議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを

目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

四月五日(日) 午後、安曇川公民館で第百四回の塾を開きました。

## 高島藤樹会の活動

今回は、『中庸解』の第二十章の続きです。「天下国家を治めるには九經あり……」。大意は、人の上に立つものは、有能な人材を活用し、周りの親族のみならず庶民にも心を配り、事業者や旅行者も配慮するようにすれば、自然と天下の政治が上手くいくというものです。

今回は、新型コロナウイルスの感染拡大が進んでいることについて考えました。ダライ・ラマ法王の宗教者としてのメッセージ、池上彰氏の歴史的な視点からの提言などをみました。そして、藤樹の「孝」思想と関連付けて考えてみました。藤樹思

想では、我欲への固執を除去して大宇宙(天)を敬い、隣人を愛することを教えています。しかし現代社会では我欲の増殖がどんどん進み、それは地球資源の多消費↓地球温暖化↓極度の気候変動となって環境破壊が進み、貧富の格差が拡大し、戦争等を引き起こしています。天がこうした現代の人類の行為に警鐘を鳴らす意味でウイルスを発生させたのではないかと考えられます。コロナウイルスは、人類の生命上にも経済上の甚大な被害をもたらし、影響の長期化は避けられません。



そこで、この危機をいかに乗り切るかを皆で議論しました。総合的に考えると以下がいえると思います。

- ① 人類の連帯、自国第一主義から国際協調、国内協調(利他の心)への転換が必要、
- ② 改善策があるなら心配せずにそれを実行する、
- ③ 我欲をコントロールする価値観への転換、
- ④ 個々人が免疫力を高め、自衛することを心掛ける。

五月はコロナで休講とし、六月六日(土) 午後、第百五回の塾を開きました。京都・大津からも含め十名の参加でした。

今回は『中庸解』第二十章の続きで、「九經の効」という節です。大意は、「中庸の道(人間の生きるべき道)は太虚(天)に満ちているが、人々は欲などの惑いのためその道から離れている。そこで君主が五事を正してその道に戻れば、身が修まり中庸の道を得ること(修身)ができる。修身ができれば、(中略)周辺から順に天下が治まっていく」。

そのことが現代にも通用するかについて、「ドラッカーの教え」で説明しました。古来、統治のためには、「機能」と「尊敬心」が重視されてきたが、近年大きく欠けている「尊敬心」が重要である。さらに、対立の「バランスを取る」のではなく、「調和」が大事である。「調和」とは、共通の利益を基盤に協力が行われる、と述べています。その根底に

は利他の精神があると思います。  
七月四日(土)午後、第百六回の塾を開きました。

最初にコロナに関連して、フランスの経済学者ジャック・アタリ氏の意見、「人類が感染症や気候変動の脅威からの生き残りを望むなら、利己主義でなく、利他主義が自身の利益になることを意識すべきであろう」を紹介しました。

『中庸解』第二十章の続きです。大意は九経を行う方法について「①身を修める・・・衣服を正し、五事を正して純一の本心に復る、②賢臣を尊ぶ・・・良知に至れば巧言や美色や貨財に惑わされない、(中略)③諸侯を懐くる・・・各地域の責任者の事情に合わせて待遇する。これらの実行は中庸の本体である愛敬の心を用いることである」。

フリートリーキングでは、「九経を行う根本は『誠』だと分かった」、「学び続けることが大事だと再認識した」、「頭を使う楽しさ、素晴らしさを感じる充実した時間を持てた」等の意見を頂きました。

八月二日(日)午後、第百七回の塾を開きました。

今回は『中庸解』第二十章の続きです。大意は「およそ物事は何事によらず予め準備をすれば成立するけれども、それをしなければ失敗するものである。誠はすべてのものの根柢であるから、人は何事においても

発言や行動を発する前に誠の心で省察しなければならぬ。下位に在つて上の信任を得られなければ民を治めることができない。上の信任を得るには、朋友に信じられねばならぬ。(中略)すなわち五事を正して身を誠にすることが肝要である」。

ここで、「致知」に掲載された「お釈迦さまが説く成功の要諦」により話を補強しました。釈尊は人間として全面的な成功をするために六方(自分の周りの人々)への礼拝を説かれていますが、その前に殺生等の悪い行為を止め、欲などの心の汚れを落とすことが必要と言われています。そして六方へのお勤めができる人は自動的に社会のリーダーになる、と説かれています。儒教も仏教も人生で大事なことの教えの本質は変わらないということです。

フリートリーキングでは、「この塾で『中庸』を学んで、自分ならどう解釈するかのヒントが得られる」等の意見を頂きました。本塾に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

## 藤樹人間学塾 今後の予定

九月十九日(土)、十月三日(土)

十一月七日(土)、十二月五日(土)

■日時 (原則) 十五時～十七時

■場所 (原則) 安曇川公民館

## 「藤樹紙芝居」の紹介⑬

### 『熊沢蕃山の入門』

#### (解説)

熊沢蕃山は、京都で生まれました。八歳の時、母方の祖父である水戸藩士の養子になり、熊沢姓を名乗って少年時代を水戸で過ごしました。貧しい浪人一家が生きるための選択であったと考えられています。

十六歳で備前藩主池田光政に仕えましたが、四年後には自らの未熟さを思い、修業のため職を辞して実家の家族が身を寄せる近江の桐原に戻りました。

この紙芝居は、蕃山が修業のために職を辞し学徳優れた師を求めるところから始まります。「我が師は、中江藤樹先生」と決めて、ようやく入門を果たします。対面して学んだ期間は、わずか八ヶ月足らずでしたが、その後は書簡を通して師弟関係を続け、大きな影響を受けました。

再び光政に仕えた蕃山は、学問で得た知識や精神を生かし、藩民の福利を重視した治水事業等の藩政に業績をあげました。陽明学の研究の開祖と言われた藤樹先生は、「知行合一」の精神を重視しました。熊沢蕃山は、江戸時代初期、その精神を藩政に生かした第一人者と言えます。

備前藩を辞した蕃山は、陽明学を中心に学問を深め、学者として多くの書物を書き著しました。

▼参考文献

- ・ 児童用副読本『藤樹先生』(編集・発行 高島市教育委員会)
- ・ 『熊沢蕃山その生涯と思想』吉田俊純著 (発行: 吉川弘文館)
- ・ 『熊沢蕃山』さいわい徹脚本・画(編集 発行: 安曇川町・同教育委員会)

#### (紙芝居)



① 蕃山は、子どものころから学問が大好きで、いろいろな本を読んでいた。十六歳の時、備前の藩主・池田光政に仕えました。数年たった時、光政は蕃山に大切な仕事をさせようとしました。

光政「私は、だれもが安心して暮らせる備前藩にしたい。そのために力を貸してほしい。」

蕃山「殿様、ありがたいお言葉ですが、私がりっぱな仕事をするには、学問と心の修業が必要かと思えます。どうか、私にしばらくおひまをください。」

こうして、蕃山は城づとめをやめて家族の住む近江の桐原に帰りました。

② (半分まで引く)

桐原にもどった蕃山は、一人で学問に励みました。しかし、思うように進みません。

蕃山「ああ、難しくて何度読んでも解らない。京都に行って良い先生をさ



がそう。」  
(残りの画面を全部引く)



京都には優れた先生が多いと聞いて、蕃山は毎日探し歩きました。しかし、行いが悪かったり、研究が浅かったりしました。どうしよう、習いたいと思う先生には出会えませんでした。

蕃山「優れた先生を探すのが、こんなに難しいとは思わなかった。どうすればいいのだろう。」

蕃山は宿にもどって、考え込んでいた時です。近くの部屋から宿のお客と宿屋の主人らしい二人の話し声が聞こえてきました。

③ お客が話をしています。

お客「近江の榎(現在大津市和邇)の宿屋で、私は心の美しい馬方と出会いました。その馬方は、川原市(現在高島市安井川)から侍を馬に乗せ、七里(約三十km)離れた榎の宿屋まで送りました。その侍は、加賀の殿様の大切なお金を京都まで届けるために旅をしていた飛脚だったのです。ところが、飛脚は宿屋に着いて、それをなくしてしまったことに気づき、『二百両の大金がない』と、大騒ぎ。その上、『切腹か、打ち首になる』と、泣き出しましてな。」



宿の主「それはいへんなことでしたな。ところで馬方とどういう関係があるのですか。」  
お客「それなんです。川

原市の家に帰った馬方が馬の汗を拭こうとして、鞍の下から大金の入った財布を見つけたのです。『お侍の忘れ物ではないか』と心配し、往復十四里(約六十km)も歩き、疲れた体で再び夜道を走って、榎まで届けてくれたのですよ。」

宿の主「何と、親切な馬方ですね。」

お客「飛脚は、『親切な馬方のおかげで命拾いをした。』と泣いて喜び、馬方にお礼金を渡そうとしたのですが、馬方は『お客様の忘れ物を届けただけです。お礼はいただけません。』と言って受け取りません。その馬方は、『私は近くの小川村の勉強会で、中江藤樹先生にいつもよい話を聞き、その教えを守って暮らしている。』と言っています。」

宿の主「そうでしたか。よいお話を聞かせてもらいました。」

蕃山「近江には、中江藤樹というお方がおられるのか。村人をそこまで教えらるる先生なら、学問や行いのりっぱな方にちがいない。この方こそ、私が探し求めていた先生だ。小川村へ行こう。」

④ 蕃山はすぐ支度をし、小川村を訪ねました。静かで落ち着いた村です。先生の家の前には、その先生の名前の通り、大きな藤の木が青々と茂っています。

蕃山「私は、熊沢蕃山と申します。藤樹先生はおられますか。先生の弟子にしていただきたくて、桐原からお訪ねしました。」



先生と出会った蕃山は、その澄んだ目の輝き、温かみのある言葉から、「この先生以外に、私の求める先生はいない。」と感じました。

蕃山「私が教えていただきたい先生は、中江先生の他にございません。どうか、弟子にしてください。」

先生「私は、あなたに教えるほどの学問も、徳もありません。どうぞお帰ってください。」

蕃山が熱心に頼んでも、これ以上聞いてもらえませんでした。蕃山は、仕方なく桐原へ帰りましたが、「私が求めている先生は、中江藤樹先生だったのだ。また、必ずお願いに行こう。」と考え、一人で学問に励みました。

⑤ 蕃山は、朝晩が冷え込むようになってきた十一月、再び、小川村にやってきました。蕃山「私は、以前に入門をお願いに参りました熊沢という者です。どうか、



先生にお取り次ぎください。今回は入門をお許しくくださるまで、ここに決心して参りました。」

先生母「まあ、桐原の熊沢さんですね。伝えましょう。」

お母さんは、藤樹先生に取り次ぎましたが、先生は蕃山に会おうともしません。

⑥ 蕃山は、門前を持ってきたござを敷き、その上に正座をしました。正座をした蕃山は、静かにただ一点を見つめていました。お日さまが傾きました。あたりは暗くなり、ひしひしと寒さが迫ってきました。冷たい土の上に座っている蕃山の姿を、先生のお母さんは心配そうに見ていました。



夜が更けてきました。先生のお母さんは、温かいお茶とおにぎりを持っていきま

先生母「さあ、これでもお上がりなさい。」

蕃山「かたじけない。ありがとうございます。こうして、二日目を迎えました。蕃

山は姿勢を崩さず座っています。この日は、夕方から雪が舞い始めました。

⑦ お母さんは心配でたまらず、藤樹先生の部屋に行きました。



**先生母**「これ、与右衛門。外は雪が降り始めましたよ。あんなにまでしておられる方を、いつまで放っておくのですか。せめて、会って

おあげなさい。」

**先生**「まだ座っておられるのですか。お母さん、分かりました。では、この部屋で会いましょう。」

お母さんは、ほっとして蕃山を呼びに行きました。

**先生母**「熊沢さん、先生の部屋にお入りなさい。」

**蕃山**「そうですか。(はずんで言う)会っていたのですか。」

⑧ 部屋に通してもらった蕃山は、深々とおじぎをしました。

**蕃山**「私は備前藩をやめた後、一人で学問を続けてきました。しかし一人では、解らないところが多くて困っていました。先生、私は学問を修めることができたら、再び備前に戻り、人々が貧しい暮らしや、洪水・干ばつ等の災害で苦しむことのない藩にしたいと考えています。そのため、先生のお力を借りたいのです。先生、私を弟子にしてください。」

先生「熊沢殿、あなたの学問への志がよく分かりました。私も長い間、一人で学問をしてきましたので、独学の苦勞はよく分かります。また、あなたが真の学問を志しておられることを知り、うれしく思いました。学問への思いは私も同じです。共に力を合わせて学びを深めましょう。」



先生は、蕃山の手をしっかりと握りしめました。

先生は、蕃山の学問の志が優れており、考え方も深いと感じました。そこで、蕃山がこれまで学んできた儒学を丁寧に教えるだけでなく、お互いの考え方を語り合うようにして、学問を深めました。

**蕃山**「先生、学問の内容を実際の生活の中で生かすことが大切ですね」

**先生**「そうですね。だれでも、心と行いを共に高めることで、学問は進みます。」

こうして、蕃山の学問は、ぐんぐん進みました。

ある日のことです。蕃山は先生にこんな話をしました。

**蕃山**「先生、学問が進みかけたばかりなのに、実は、家族を養うため桐原へ帰らなくてはなりません。しかし、先生に教えていただいたので、これからは一人でも学問は続けようと考えています。」



蕃山がわずか八ヶ月ばかりで桐原へ帰ることになったのは、父親が仕事を求めて江戸へ行き、働き手がいなくなった家族は、非常に貧しい暮らしになったからです。

**先生**「よく分かりました。家族を大切にしながら、今のあなたなら、住まいが離れても学問はできますよ。」

**蕃山**「先生の門弟として、これからも励むつもりです。よろしくお願いします。」

**先生**「解らないことができたなら、手紙をください。いつでもお力になりますよ。」

**蕃山**「先生に教えていただいたご恩は、一生忘れません。これからもよろしくお願いたします。」

⑩ (半分まで引く)

桐原に帰った蕃山は、家族の生活に驚きました。毎日、まずい「ゆりこぞうすい」ばかりです。親類や近所でもらったくず米に、雑草の種類やぬかみそを混ぜて炊くのです。蕃山は苦しい生活を助けるため、家族とともに朝早くから畑仕事をしました。

**蕃山**「畑仕事はしんどいけれど、野菜作りは楽しいなあ。『腹いっぱい食べられる。』と、家族が喜んでくれるしな。今日もがんばろう。」

(ここで、全部引く)

蕃山は、畑仕事でくたくたになりま



したが、夜の勉強を楽しみにして頑張りました。先生からの手紙が届き、学問の進み具合や暮らしのことを心配してくれました。数年たったある日、先生から、陽明学の研究内容が書かれた本が届きました。

**蕃山**「ほう、先生が新しく研究を始めた本だ。とても解りやすい。そう、先日読んだ本で、解らないところがあつた。手紙を出して教えていただこう。」

こうして、蕃山の生活は貧しくても心は充実していました。藤樹先生の心配りのお陰で、門人としての生活が送れたのです。

**蕃山**「先生のお陰だ。こうして離れて勉強していても、学問が深まってきた。ありがたいことだ。」

蕃山は、次第に力をつけ、藤樹先生の学問や人としての生き方を、深く学びとりました。

⑪ (半分まで引く)

備前藩をやめた蕃山が、貧しい暮らしをしながら勉学に励んでいることを、家老に知らせた人がいました。

**家老**「殿様、七年ほど前まで殿様に仕えておりました『熊沢』のことを覚えておられますか。」

**光政**「覚えているとも。『強い侍になりたい』と言って、武術の修業に励



家老「近江の桐原の親戚

んでいたのう。何事も熱心な若者であった。今はどこで、どんな暮らしをしているのじゃ。」

に、家族ともども身を寄せて、貧しい浪人暮らしをしているそうでございます。昼は農業に励み、夜は一人で勉強に打ち込んでいると聞きました。だれにも仕えず苦勞しているようで、人間としても磨きがかかっていることでしょう。」

光政「やはり、苦勞をしているのか。ならば、もう一度備前で取り立てよう。声をかけてみよう。」

家老「はい、承知しました。さっそく呼び戻しましょう。」

(残りの画面を全部引く)  
こうして、蕃山は七年ぶりに二十六歳で再び備前藩に戻ってきました。

光政「蕃山、久しぶりじゃ。うれしく思うぞ。」

蕃山「殿様、呼び戻していただき、誠にありがとうございます。」

光政「そなたは、私のもとを離れて修業するという約束であったな。七年間の修業について、話してみよ。」

蕃山「長い間、おひまをいただきました。再び、お殿様にお仕えできて誠に幸せでございます。」

光政「どんな学問を、だれから学んだ

のじゃ。聞かせよ。」  
⑫ 蕃山「なかなか『この先生に』と、思える方に巡り会えませんでした。近江の中江藤樹先生の門人にしていただくことができました。お陰で、八ヶ月ばかりの間、直接先生から学問の手ほどきを受けられました。その後、桐原に戻りましたが、手紙のやり取りで学問を続けることができました。」



蕃山は、これまで学んできた朱子学や儒学を深め、さらに、藤樹先生が研究している中国の学者「王陽明」の学問を初めて習い、藤樹

先生の『陽明学の研究』を学んだことも伝えました。  
光政「そうであったか。良い修業ができたではないか。苦勞したことや学んだことを生かして備前のためにしっかりと働いてくれ。よいな。」

蕃山「はい。ありがたいお言葉に感謝申し上げます。私は、精一杯お伝えいたします。」

光政は、学問を好み、藩の政治に熱心な藩主でした。蕃山が藤樹先生に学んだ学問に強い関心を持ち、蕃山を呼んでは、学問の話聞きましました。

⑬ 蕃山が再び仕えるようになって数年が過ぎました。ある日、光政は蕃山を呼びました。

光政「相談したいことがある。備前では、ここ数年、水害や干ばつなどの災害がたびたび起きている。食べる物がなくて、飢え死にする者も大勢出ている。わしは、災害を防ぐ方法がないかと、以前から悩んできた。熊沢、何か良い考えがあれば教えてくれぬか。」



忘れられませんが、人民にとつて安心して働けるのは、何よりの幸せでございます。その上、災害が起きなければ蕃も豊かになります。」

光政「そのために、藩としてしなければならぬことは何じゃ。」  
蕃山「水害を防ぐには、山に木を植えて山林や山地に水を蓄える力をつけること。もう一つは、川に堤防を築き、洪水を防ぎます。また、余分な水はため池や川の水を上手く利用するため、水を引く水路が必要ですが、どれも大きな仕事ですが、計画的に進めることで、必ず実現できます。」

光政「そうか、なるほど。よく分かったぞ。わしは、人民が安心して暮らせる国を造りたい。熊沢、さっそく、計画を立てよ。」

蕃山「はい、分かりました。」  
蕃山は、こうして光政のもとで、山

地の植林、河川堤防、ため池工事をして洪水災害を防ぎ、農業の生産力を高める治水工事を次々に行いました。また、多くの人達が学べる学校づくりを計画したり、人民が幸せに暮らせる国づくりを考えたりして、優れた政治を殿様のもとで行いました。

⑭ 蕃山は三十七歳の時大けがをしたので、三十九歳で仕事をやめました。  
蕃山「私は、備前藩で人々が安心して暮らせるよう、たくさんの大仕事をさせてもらうことができ、幸せであった。これからは、藤樹先生から教えていただいた陽明学を、一人でも多くの人に伝えるために、本を書きたい。」



こうして、備前藩をやめた蕃山は、藤樹先生が日本で初めて研究した陽明学の教えを中心に、蕃山自身の考えを盛り込んで、多くの書物を出版しました。

しかし、武士を中心とした身分制度を重視する江戸幕府のおとがめを受け、ことに下総(茨城県)の古河藩に預けられました。地域の村人に慕われながら、七十三歳の一生を静かに閉じました。

- ▼制作・発行 藤樹紙芝居制作委員会
- ▼脚本・挿絵 高島藤樹会教材委員会
- ▼制作委員 足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・北川暢子・清川貞治・高谷美智子・山本義雄 (五十音順)

# 「藤樹紙芝居」を使った道徳性を養う指導展開プラン(その③)

思想普及委員会

## 1 主題 (子どもに身につけさせたい内容)

「より高い目標を立て、希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと」  
道徳的価値： 高学年 希望と勇気、努力と強い意志

## 2 紙芝居題

藤樹紙芝居⑨ <熊沢蕃山の入門>

## 3 主題に迫る

高学年になると、「何でも自分たちでやりとげなければならない」と考え、それに向かい努力する姿がみられるが、残念なことに長続きせず、目先の変わったものへと興味が移っていく傾向にある。また、頑張ろうと努力するが、不得意なものは人任せになってしまい、都合のよい楽な道を選ぼうとするのもこの時期の特徴である。

そこで、はるばる藤樹先生を慕ってやってきた蕃山が門前に座り込んで一夜を明かし入門しようとする逸話をとおして、どんな困難も乗り越えていくという根性を培うこと、そして、その困難を乗り越えた時こそ、希望や目的が達成でき、心から喜べるということを学ばせたい。

## 4 紙芝居の概要

蕃山は、16歳の時、備前藩主の池田光政に仕えたが、4年後に、自らの未熟さを知り、修学のために実家の近江の桐原で師を探しながら、独学自修していた。立派な師は見つからず悩んでいたところ、たまたま京都の宿に泊まったときに、「大変立派な先生が小川村におられる」ことを知り、弟子にしてもらうために先生を訪ねるも断られたが、諦めることなく、時を経て再度弟子入りを懇願した。二回目には、藤樹先生の家門前に昼夜を問わず2日間正座をし、やっと弟子にしてもらった。事情により、対面して先生から学んだ期間は8ヶ月足らずであったが、その後は、桐原で家族を養いながら書簡をとおして門弟関係を続けながら、先生の学問や人としての生き方を学び取った。

実力を付けた蕃山は、再び備前藩の光政に仕え、治水工事や学校づくり等々を進め、民が幸せに暮らせる国づくりを考え、すぐれた政治を行った。

## 5 指導過程

展開のしかた	問いかけ	留意点
<p>1. 資料(紙芝居)の題名を知る。</p> <p>2. 紙芝居の上演を視聴して話し合う。</p> <p>○熊沢蕃山は、どのような人だったのでしょうか。</p> <p>○どのようなことで凄い人だと思いましたか。</p> <p>○門前に座っているとき、蕃山はどんなことを考えていたのでしょうか。</p> <p>○藤樹先生は、なぜ蕃山の頼みを受け入れなかったのでしょうか。</p> <p>○蕃山が藤樹先生の弟子になれたのはどうしてでしょう。</p> <p>○再び光政に仕え、民のためにどのようなことをしたでしょう。</p> <p>3. 学習をとおして、学んだことを話し合う。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>池田光政に仕えていたこと、真の実力をつけるため仕事を辞めて自学自習する強い人、凄い人等々発表させる。</li> <li>賢いのにさらに学問しようとしたり、弟子にしてもらうまで一夜を明かし門前に座り込んだりするなどの具体的な言動を発表させ、蕃山の熱意と努力を感じ取らせる。</li> <li>師はこの先生しかない。何が何でも立派な藤樹先生の弟子にしてもらえるまで頑張ろう。</li> <li>藤樹先生の謙虚な人柄、偉大さを感じさせる。</li> <li>目標を持ち困難に打ち勝ち、努力をし続けた蕃山の熱意を感じ取らせる。</li> </ul>



## 藤樹記念館通信 ⑩

令和二年度 本館主催事業

### 「了佐てらこや小学校」

参与 武田 基裕

例年、小学校の夏休み期間の八月上旬に、中江藤樹記念館主催事業として「了佐てらこや小学校」を開催しています。早いものでこれまでに十回以上開催し、例年二十名〜三十名ほどの市内の小学生上学年（四年〜六年）の子どもたちが参加してくれています。

昨年の秋時点での計画では例年通り八月に五日間の日程で開催する予定でしたが、想像しえない、想定外の今回のコロナ禍により、開催自体が危ぶまれました。しかし、こんな時こそ、安全安心最優先の体制をとり、規模・内容等を工夫し感染症拡大防止に配慮しながら本事業を楽し



みにしている子どもたちのために開催すること自体に意義があると、指導者の西川守彦先生、澤井千晶先生、井戸菊枝先生、本館職員で共通理解し、開催に踏み切りました。

しかし、正直なところ、市内小学校の夏休み期間はたったの十六日間であり、その理由となるコロナ禍も感染者数が募集期間の夏前に急増していたこともあり、申し込んでくれる子どもたちがいるのか不安な気持ちで一杯でした。ところがそんな心配は全くの杞憂となり、開催要項と申し込み用紙が学校にとどくやいなや直ぐに良き反応?があり、結局、市内八小学校から二十七名もの小学生が申し込んでくれました。指導者の先生方、職員とも先ずは一安心でした。

事前に指導者の先生方と入念な打ち合わせを行い、コロナ禍に負けない予防策も万全に整え、事業当日の八月七日を迎えました。今年は期日を少なくするとともに日程も短くし、真に「書道」に親しみ個人作品及び共同作品を仕上げることに集中しました。毎年のお楽しみの科学体験や工作の時間がなかったことで少々物足りなげな子どもがいたことも事実ですが、そこは賢い子どもたちです。何一つ不満を漏らさずしっかりとした気持ちで「書く」ことに集中し、指導者の先生方のご指導の下、立派に作品を書き上げることができ



ました。参加したすべての子どもの満足そうな笑顔、充実した笑顔、安堵感漂う表情が印象的でした。指導者の先生方、職員一同も「本当にやってよかった」、「やっぱり子どもたちの笑顔が一番」、「笑顔は鎧（かすがい）」等々、終わってからの意見交換でも成就感一杯でした。

今のようなコロナ禍の状況がいつまで継続するかは誰にもわかりませんが、「ウィズコロナの時代」に実施できる事業の在り方、参加者が応募しやすい事業の在り方を、安全安心最優先にしながら探っていくことが大切となってくるでしょう。形式にとらわれずに「参加してよかった」と全ての子どもたちが感じてくれるような「了佐てらこや小学校」に育てていくことを全職員で誓い合い、今夏の本館の主催事業を無事に終了することができました。

## 賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

- ウエストレイクホテル可以登楼
- 大津公証会 白髭博文
- 株式会社 大山建設
- 川島酒造 株式会社
- 株式会社 Grow's
- 株式会社 桑原組
- 有限会社 宏和商事
- 税理士法人 小畑会計事務所
- 株式会社 澤村
- 有限会社 白浜荘
- ソエダ 株式会社
- 田中マネジメント事務所
- 株式会社 TADコーポレーション
- 鉄屋商事 株式会社
- 寺子屋まなごし童心塾
- 株式会社 戸井薬局
- とも栄 藤樹街道本店
- 中村印刷 株式会社
- 株式会社 中村測量設計
- ニツケイ工業 株式会社
- 有限会社 馬場塗装
- 保木機料 株式会社
- 有限会社 綿庄食品店

(五十音順)

### お詫び

前号での「賛助会員一覧」で、「株式会社 澤村」様が欠落していました。

謹んでお詫びいたします。